

地球環境を守りながら、住環境の充実を目指す。
循環を大切にした森林事業の総合企業

国産材を有効に活用して

日本の森林を再生し

地域へ貢献していきたい



秋田市に本社を構える秋田プライウッド株式会社。もともとは県に誘致され、昭和38年に設立された太田産業株式会社が母体だが、本荘の企業と合併し、現在の社名となった。創業から60年余り、国産材を使った合板やフローリング、内装材の製造販売を行っており、国産材合板の生産量は国内最大級を誇っている。長く木材を活用して生産してきたが、今は森林環境事業にも取り組んでいる。取締役総務経理部長の金田憲明さんにお話を伺った。



秋田プライウッド 株式会社
取締役 総務経理部長 金田 憲明

〒010-0941
秋田市川尻町字大川反232
TEL: 018-823-8511
FAX: 018-862-1513
<https://www.aplywood.co.jp/>



HP

国産材を使った合板
国内最大級を誇る

秋田プライウッド株式会社で売上の8割以上を占める合板とは、木材を桂剥きのように薄く切り出してできた単板を重ね合わせ、接着して作られるもので、繊維方向を直交するように重ねているため、あらゆる角度からの負荷に強い特徴がある。同社では、強度や耐久性に優れた構造部材として使える「針葉樹構造用合板」や、より強度をもたせ、準耐火製品としても認定された「ネダノン」シリーズなどを製造・販売。また、内装材として秋田杉の間伐材を活用した「杉小町」も手掛けている。

「戦前、日本では木材自給率が100%近くありましたが、戦後に南洋材と呼ばれるマレーシアやインドネシアなどから輸入された径の太い丸太が多く使用されました。森林破壊等の環境問題や伐採規制の表面化もあり、熱帯雨林産の南洋材



①

- ①丸太から薄く切り出してできた「単板」を貼り合わせる作業。
- ②単板の生産から品質検査まで行う。
人手不足を補うため、省人化できる工程は設備投資を行った。



②

からロシア等の北洋カラマツを中心とした針葉樹に代わったものの、輸入木材への依存が続いた結果、平成14年には日本国内の木材自給率は18%台にまで落ち込みました。近年はロシアによる輸出関税の強化等の影響で、ここ10年ほどは『国産材の時代』と言われており、当社でも5年前から『使用する原木は100%国産材』による製造を行っています。

木材を使うだけの時代から
管理し育てて使う循環型へ

日本の人工林では多くの樹木が伐採期を迎えているが、手入れが行き届いておらず、同社では、これからは森の循環に関わる活動も求められると考え、平成13年、現在の井上篤博社長が就任した際に『「地球環境の保護と住環境の充実」の実現を目指して」を企業理念に掲げた。

「木を適切な時期に伐採し、風通しや日当たりを確保することで健康的な森になる。もちろん、植樹も必要です。使うことだけでなく、手入れし、植樹して育てるという循環システムを確立するため、平成15年に秋田県鳥海山麓に山林280haを取得し『アキブラの森 鳥海』と名付け、植林間伐事業を開始。平成24年には社内に『森林事業部』を設立、その後森林環境事業をさらに強化するため、昨年その事業部を分離独立させ『エーピーフォーレ(株)』を発足させました。」



向浜工場内に運ばれてくる原木。



厚生棟1階にある社員食堂。福利厚生制度を見直し、社員にとって魅力がある職場になるよう改善。

植樹のために育てている杉の苗木。
少花粉の苗木も育てている。

エーピーフォーレ(株)では秋田プライウッドが所有する県内7箇所の社有林(総面積約740ha)の管理を行うほか、杉の苗木を生産している。昨年は20万本の苗木を育てており、今年は25万本ほどの生産を目指している。

木材を使う場面を増やすため
新たなスタイルを提案

昨年4月、向浜工場にある厚生棟を改修し、構造用に使われることが多い合板を内装に活かした木質化リノベーションを行った。エントランスには合板で表された社名ロゴがあらわれているほか、合板の積層面を「魅せる」ことで意匠性を高めるなど、新たな挑戦が随所に見える。

「木材を多く使うことで炭素をストックし続けることができ、地球温暖化防止に貢献できる。木を使う場面を増やしたいと考え、広く世の中に、合板の新たな活用法を提案するためにも実施しました」と金田さん。

国産材を無駄なく活用し、その利用拡大に取り組んでいることや持続可能な森林経営を目指していることが評価され、昨秋、木材利用推進コンクールの国産材利用推進部門で「木材利用推進中央協議会会長賞」を受賞した。今後も元気な森を育てながら人々の暮らしを豊かにするため、突き進む。